スーダン渡航報告

2024年12月、理事長川原がスーダンに渡航しました。
今回の目的は、現地の状況を把握し
今後のロシナンテスの活動の準備を行うためです。

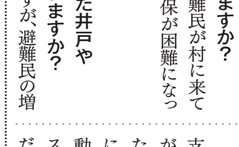
右よりガダーレフ州シェリフ・ハサバッラ村の村長ハサンさん、川原、元現地スタッフのインティサールさん、インティサールさんの夫のサウディさん

ロシナンテスは2006年の設立以来、スーダンで医療を中心とした支援活動を行ってきました。しかし2023年4月に、スーダンの首都ハルツームで国軍とRSF（Rapid Support Forces：ダルフールの民兵組織を起源とする準軍事組織）による軍事衝突が勃発。日本人スタッフは国外退避を余儀なくされ、それ以来、スーダンの地へ戻ることができていませんでした。

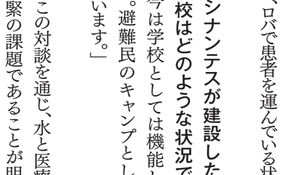
この度、数か月をかけビザを取得し、首都機能が移管されているポートスーダンへ渡航することができました（ポートスーダンは情勢が比較的安定しています）。

久しぶりの再会

現在リバーナイル州で避難生活を送っている現地スタッフのイプティサムと、ポートスーダンで再会することができました。彼女には、ビザの取得など渡航に関する手続きを担ってもらいました。また、元ロシナンテスサッカークラブのメンバーで、現在ドバイで働いているゼインさんも駆けつけ、滞在中の視察許可の交渉や通訳などでサポートしてくれました。



ポートスーダンの街の様子



ポートスーダンの海辺

ポートスーダンの街は、海辺でお茶をする人々がいるなど、一見すると平穏に見えます。しかし勝手に写真を撮るようなことはできず「軍の施設は絶対に撮るな」と厳しく注意され、緊張する場面もありました。一方で、夜になると路上で楽しく歌を歌う人々にも出会いました。

経済状況

インフレの影響で、お札の枚数を数えるのが大変でした。国軍がわずか2週間という短期間で、旧紙幣から新紙幣に切り替えを行っていました。そのため、銀行は紙幣の交換を求める人々であふれていました。ポートスーダンは現在国軍の支配地域ですが、一時RSFに占領されていた時期があり、その際にRSFが中央銀行から大量の現金を盗んだとされています。国軍は、RSFが奪った旧紙幣を無効にするために、新紙幣への切り替えを進めているのです。

スーダン保健省訪問

スーダン保健省を訪問し、国際局の担当者と話をすることができました。医薬品や医療機器の不足が深刻であり、救急車の多くもRSFに奪われたとのことでした。日本からの支援を要請されており、ロシナンテスとしてどのような支援ができるか検討していきたいと思います。

避難民キャンプを視察

ポートスーダンの避難民キャンプ視察の許可を得るのに、大変苦労しました。連邦人道支援局（HAC）、連邦保健省、州の保健省、軍など5か所からの許可取得に約2日を要しましたが、ゼインさんの協力もあり、無事視察が実現しました。

このキャンプは、もともと専門学校があった場所に設置されており、4000人以上の避難民が生活しています。二つのテントに2、3家族ひしめき合い、水はぎりぎりの量、食事は1日1回支給されていました。電気はなく、夜は真っ暗です。視察当日は医学部の学生がボランティアに来ていましたが、診療所はなく、医療の提供が十分でない状況でした。

今回の視察はポートスーダンのキャンプでしたが、首都ハルツームに近いカッサラ州やガダーレフ州には、もっと多くの避難民がいると聞いています。

残念ながら撮影が制限されており、写真は遠くからしか撮影できませんでした

キャンプの住居の様子
ソーラーパネルで携帯電話を充電しているようです

ガダーレフ州 シェリフ・ハサバッラ村の村長ハサンさんと対談

今回ロシナンテスが活動していたガダーレフ州には行けませんでしたが、シェリフ・ハサバッラ村の村長ハサンさんがポートスーダンまで来てくださいました。ゼインさんの通訳のもと、村の状況を伺いました。

右からハサンさん、川原、ゼインさん

村は今どうなっていますか？

「内戦以降、多くの避難民が村に来て大変です。特に水の確保が困難になっています。」

ロシナンテスが作った井戸や診療所は機能していますか？

「井戸は機能していますが、避難民の増加により、水を汲むための行列が200メートルにもなっています。診療所は、内戦のために政府がなにもしてくれず、薬も働き手も足りていません。医者は1人だけいますが、1日に300人もの患者が訪れています。救急車もなく、ロバで患者を運んでいる状況です。」

ロシナンテスが建設した学校はどのような状況ですか？

「今は学校としては機能していません。避難民のキャンプとして使われています。」

この対談を通じ、水と医療の支援が喫緊の課題であることが明確になりました。ハサンさんとは、今後も協力し合うことを約束しました。

約1週間の滞在でしたが、今後の支援の方向性について議論することができ、有意義な時間となりました。今回の渡航で得た情報をもとに、今後ロシナンテスとしてできる活動を具体化していきます。引き続き、スーダンの人々にお心をお寄せいただければ幸いです。

遠回り

《第33号》
認定NPO法人ロシナンテス
発行
〒802-0082
北九州市小倉北区古船場町1-35
北九州市立商工貿易会館 7F
TEL：093-521-6470
E-Mail：info@rocinantes.org
特定非営利活動法人ロシナンテス ROCINANTES

スーダンだより
軍事衝突から２年 ……2面
ザンビアだより
母子保健事業アップデート…3面
ザンビアだより
結核事業の１年 ……4面
雲外蒼天／
日々ツラツラ日記 ……5面
国内イベント情報
インターンコラム ……6面
国内ニュース ……7面
事務局からのお知らせ ……8面

事務局だより

こんにちは、ロシナンテスの立花です。いつもあたたかいご支援をありがとうございます。ここ数日ザンビア出張に向けて荷物の準備をしています。駐在職員からリクエストのあったインスタント焼きそばやのり、日本茶のほか、わかめスープや和風パスタのもと、飴細工など、楽しくなって色々買いこんでしまいました。現地スタッフには柿ピーが好評ということで、色々な味の柿ピーも揃えています。わさび味、カレー味、うどん味……さくら味のチョコがコーティングされているものまでありました！味によってどのような反応が見られるか今から楽しみです。

今回の出張では、初めて海外に行く職員も一緒に向かう予定です。準備段階から緊張が伝わってきていますが、彼女の新鮮な目で見るザンビアを皆さまにもお届けできるよう、色々と発信していきたいと思います。

私たちNPO法人ロシナンテスの名前は、小説「ドンキホーテ」に出てくるドンキホーテが乗る痩せ馬のロシナンテに由来しています。「私たち一人一人は痩せ馬ロシナンテのように無力かもしれないが、ロシナンテが集まり、ロシナンテ𝓼になれば、きっと何かできるはずだ！」と考え、「ロシナンテス」と名付けました。

今後もこれを信念として一歩一歩進んでいきたいと考えておりますので、皆さまのご支援をよろしくお願い致します。

ロシナンテス応援企業

内科・外科・消化器内科・緩和ケア内科
医療法人 明気会
岩本クリニック
理事長　岩本拓也
北九州市小倉南区中貫一丁目20-50
TEL 093-472-1281
FAX 093-472-6712

がんばれロシナンテス!
税理士法人
小城会計事務所
北海道旭川市東光８条１丁目１-１
TEL.0166-31-2313

内科／消化器内科／リウマチ科
柏木内科医院
院長　柏木 陽一郎
福岡県北九州市小倉北区片野2-21-10
tel 093-921-7943
http://www.kashiwagi-naika.com/

ロシナンテスのスタッフを応援します!!
日常の事業活動の利益を
NPO活動の篤志へ繋げたい
時計宝飾・古物売買
株式会社 ブランドリーネ
代表取締役 青山晃一
〒276-0046
千葉県八千代市大和田新田355-16-103
TEL:047-450-5720
yachiyo@e-daikoku.com
https://shop.e-daikoku.com/info/spot/detail?code=0000000239

重要！本人認証サービス（3Dセキュア）の導入について［クレジットカードでのご寄付決済時］

日頃よりロシナンテスへのあたたかいご支援をありがとうございます。クレジットカードの不正利用被害の増加に伴い、ロシナンテスでは、ご支援者さまにより安心・安全にご利用いただけるよう本人認証サービス「3Dセキュア2.0」を導入いたしました。

本人認証サービス（3Dセキュア）とは

ロシナンテスのウェブサイトでご寄付のクレジットカード決済をする際に、ワンタイムパスワードなどでご本人様であることを確認する追加の認証システムです。拡大し続けるクレジットカードの不正利用被害の対策として、すべてのECサイト事業者に本人認証サービス（3Dセキュア）の導入が義務付けられました。これにより、ご利用のカードが第三者によって不正利用されることを未然に防止することができます。

ご利用のクレジットカードの本人認証サービス（3Dセキュア）設定および認証の方法は、カード発行会社により異なります。詳細はご利用の各カード発行会社にお問い合わせください。

＜ご利用イメージ＞

お支払い方法にクレジットカードを選択した場合、お申し込み内容の確認ページで「同意の上注文する」ボタンを押すと、カード会社の判定が行われます。リスクが高いと判定された場合は、カード会社が提供する本人認証画面が表示されます。

VISAカードの場合の表示イメージ

本人認証画面でワンタイムパスワードや指紋認証などで本人確認を行い認証されると、クレジットカードの与信に進みます。与信が通るとご注文完了となります（リスクが低いと判定された場合は本人認証画面が表示されず、与信後にご注文完了となります）。

SNS投稿で社会貢献できるキャンペーン「#ノーサイドアクション」

Instagramへ投稿するごとに、50円がスーダンへの支援に［期間：2025年4月4日（金）～5月16日（金）］

本キャンペーンは、"手と手を合わせた"シーンを撮影し「#ノーサイドアクション」のハッシュタグをつけて投稿すると、1投稿50円がロシナンテスが活動を行うスーダンへの支援になるものです。内戦が勃発して2年となる4月に、改めてスーダンの平和を願う声を可視化できればと思い企画しました。「平和」への想いを、投稿というアクションに変えませんか。詳細は同封のチラシをご参照ください。

写真/内藤順司

スーダンだより

Sudan

灼熱の大地で奔走するロシナンテたちの〝いま〟

スーダン軍事衝突から2年

スーダンの首都ハルツームで国軍とRSF(Rapid Support Forces:ダルフールの民兵組織を起源とする準軍事組織)による軍事衝突が発生してから、4月15日で2年が経過します。国内外で避難する人々は2月末時点で1200万人を超え、およそ4人に1人が家を追われる事態となっています。

国軍が主要都市を奪還

国軍とRSFの双方が各地で戦闘を続け、停戦の兆しは一向に見えていません。今年1月、国軍はスーダンの主要都市メダニをRSFの支配から奪還しました。メダニはハルツーム州に隣接するジャジーラ州の州都であり、首都ハルツームの戦火から逃れた多くの避難民が集まっていました。しかしここでも激しい戦闘が起き、2023年12月以降、RSFの支配下に置かれていました。また、軍事衝突以来RSFの拠点となっていた首都ハルツームでも、国軍が攻勢を強め、1月には一部の地域の奪還に成功したと報道されています。

RSFは依然として、スーダン西部のダルフール地方の大半と、隣接するコルドファン地方の大半を支配しています。各地で断続的な戦闘が続いており、北ダルフール州の州都エル・ファシルでは、唯一機能していた病院の一つがドローン攻撃を受けるなど、民間人の犠牲も増えています。こうした状況を受け、アメリカの前バイデン政権は、スーダン国軍とRSFの双方が戦争犯罪を行っていると判断し、両軍の指導者に制裁を科しています。

イブン・シーナ病院(ロシナンテス設立前、理事長川原が働いていました)

8割の病院が機能不全に

この内戦による医療サービスの崩壊は深刻です。WHO(世界保健機関)によると、2023年4月の武力衝突勃発以降、スーダン国内の医療施設への攻撃が2024年9月中旬までに108件確認されています。また、紛争の影響が深刻な地域では約80%の医療施設が、その他の地域の医療施設でも約45%が、ほとんど稼働していないか閉鎖されていると推定されています。

ハルツームにあるイブン・シーナ病院は、日本政府が無償で建てたもので、150床を備えた三次救急病院としてよく機能していました。岡山大学の先生方がスーダンの先生方に技術指導を行い、スーダンで初となる生体肝移植を成功させるなど、国内トップクラスの医療水準を誇っていました。多くのスーダン人が日本に感謝の気持ちを持ってくれていました。しかしこの病院もRSFの襲撃を受け、多くの入院患者が追い出されました。透析治療の拠点でもあったため、治療が受けられず静かに命を落とした患者さんが多くいます。

教育分野でも深刻な影響が出ています。スーダン国内の学齢期の児童の90%以上が正式な教育を受けられていません。ロシナンテスの事業地では直接的な戦闘被害はないものの、安全確保が難しいために学校の再開ができていない状況です。多くの避難民が流入し、学校施設が避難場所として使用されています。

ロシナンテスの今後の支援

昨年12月、理事長の川原がポートスーダンを訪れ、現地の人々から直接情報を得ることができました。今後ロシナンテスは、以下のような活動を具体的に検討しています。

●救急車や医療機材の支援

薬、医療器具、救急車などが圧倒的に不足しているため、日本から輸送支援ができないか調整していきます。

●給水所の建設

戦闘の直接的影響を受けていないガダーレフ州の村落部でも、避難民流入により給水所には日々長蛇の列ができ、水の調達が大きな課題です。住民が十分な水を確保できるよう給水所の増設を検討します。

シェリフ・ハサバッラ村の診療所の様子。避難民として逃れてきた医師の方がボランタリーで診療をしているそうです

内戦が長引くスーダンにソーラーランタンを寄贈

パナソニックホールディングス株式会社様よりご寄贈いただいたソーラーランタン504台を、スーダン村落部の住民の皆さんに届けることができました。

パナソニックホールディングス株式会社様は、無電化地域にあかりを届けることで、教育・医療・経済・安全などの課題解決に貢献することを目指し、長年にわたりソーラーランタンの寄贈プロジェクトを実施されています。

2022年から2023年にかけて、ロシナンテスの事業地である北コルドファン州の4つの村での配布を計画し、調整を進めていました。しかし、ソーラーランタンが無事に州都オベイドへ到着し、配布を目前に控えたタイミングで内戦が勃発。現地パートナー団体の倉庫からランタンを運び出すことが難しくなってしまいました。

首都ハルツームほどではないものの、オベイドでも度々戦闘が起こり、民兵による略奪も相次いでいました。このような中、倉庫で1年半もの間、無事保管することができたのは幸いでした。2024年11月、状況が落ち着いたタイミングを見計らい、州都の倉庫から車で2時間ほどの事業地に届けることができました。

このソーラーランタンは、教育、健康、収入向上の支援につながるよう、7つの小中学校の夜間教室、3つの診療所、そして父子家庭や母子家庭など支援が必要な家庭へ配布されました。長引く内戦の影響で、物流の停滞や物価の高騰、難民の流入など、村落部の生活も厳しさを増しています。そのような状況の中で届けることができたことを、とても嬉しく思います。今後、ソーラーランタンが地域にもたらした変化についても、皆さまにご報告できればと思います。

オンムサマーマ村での配布

ランタンを受け取ったオンムカジェック村の人々

配布にあたり地域内の調整をしてくれた村のリーダー、アリさん(左から2番目)

ザンビアだより

命をつなぐために 専門家とともに挑むザンビア母子保健事業

ザンビアで母子保健事業をスタートしてから、約5年が経ちました。ロシナンテスの活動も、より高度な専門性が求められる段階に入っています。事業の質をさらに高めるためには、それぞれのプロセスで根拠を明確にしていくことが必要です。そのため、ザンビア事業部では日本人の専門家を積極的に受け入れ、今後もこの流れを一層強化していく予定です。

専門家の皆さんには、現場での技術指導に加え、プロジェクト運営のサポートや、改善活動の推進など、多岐にわたる役割を担っていただいています。例えば、データ分析や現場でのとりまとめ、さらには状況に応じて保健行政への提言活動など、日本では経験しないような業務も求められることがあります。日本のやり方がそのまま通用するわけではないため、現地の人々と意見の違いを認め合い、互いが納得できる解決策をみつけるための粘り強さや、信頼関係を築く力も欠かせません。

妊婦さんに寄り添う助産師の長井さん。出産に立ち会ったところ、生まれた子に自分の家族の名前を付けてくれたそうです

約4カ月間ザンビアに滞在した助産師の長井菜摘さんも、当初は診療所スタッフの業務姿勢に強い違和感を抱いたと言います。「一つの命も失いたくない」という長井さんの思いと、「死」が日常化している現地スタッフの意識との間に、大きなギャップがあったからです。

長井さんは、1週間マザーシェルターに泊まり込み、診療所での仕事を間近で観察しながら、出産の立ち会いやスタッフとの対話を通して、診療所スタッフの意識やスキルレベルの理解に努めました。指導する際も、まずはロシナンテスのスタッフと事前に何度も話し合い、伝えるべきポイントを整理し、そのうえで現地スタッフの口から改善策を伝えてもらうなどの工夫をしました。それでもすぐにすべてが受け入れられるわけではなく、地道な取り組みを続けるしかありませんでした。

限られた資源のなかで妊婦や胎児の命を守る仕組みを作るには、日本のような解決策がそのまま通用しない現場だからこそ、粘り強い取り組みが求められます。ロシナンテスは、専門家の方々に定期的にザンビアに足を運んでいただき、現地の医療課題にじっくり向き合いながら、継続的にケアができる体制を整えていくことが重要だと考えています。

助産師 長井菜摘さんが見たロシナンテスの活動

初めてザンビアでお産を見学したときの第一印象は、「ザンビアの母は強い」でした。日本では、助産師や産婦さんのご家族は陣痛中に付き添い、腰をさすり、声をかけ、赤ちゃんと出会えるその瞬間まで励まし続けます。産婦さんと赤ちゃんを中心に、分娩室にいるみんなで一緒に新しい命の誕生を迎える瞬間が、私は好きでした。一方、ザンビアでは、産婦さんは硬い分娩台の上で一人で陣痛に耐えます。助産師は腰をさするでもなく、声をかけるでもなく、近くでそっと見守ります。時が来たら助産師の「Push!」との掛け声のもと、自力で赤ちゃんを出産します。産婦の産む力と胎児の生まれる力を信じて見守る姿が、助産師(Midwife)の語源となっている「with women＝女性とともにいる人」を良く体現したようで、ザンビア式のお産に感動しました。

しかし、すべての命がなんの問題もなく生まれるとは限りません。ザンビアでは、ものだけでなく人も不足しています。日本では豊富な資源を投入し、すべての命を救うことを目標とした医療の提供が大前提となっていますが、周産期死亡率の高いこの国では、医療従事者も患者もある程度、限界を受容しているように見えることもありました。すべてのお産の安全を実現させるためには、医療機器や知識、技術を充実化させるとともに、一人一人の意識の変容も大切なのではないかと感じています。

現在は、行政や医療従事者が認識する現地の課題を吸い上げ、現地の関係者が「安全な出産」を目標として協働できるようなきっかけ作りを行っています。このような活動に参加する機会をくださった川原先生をはじめ、渡航を支えていただきました事務局の方々、ザンビア駐在員の方々、現地職員の方々に感謝を申し上げます。

電気供給までの長い道のり… マザーシェルターのその後

2024年7月、ロシナンテスはザンビア中央州チコンコメニ地域にマザーシェルターを建設しました。自宅出産や路上出産など診療所以外で出産するケースが多くみられるこの地域で、診療所での安全な出産をサポートすることが目的です。

しかし建設完了から半年たっても、この新設のマザーシェルターは本来の目的を果たせていませんでした。ベッドは利用されているものの、分娩室など主な機能が使われていないのです。原因は電気供給の遅れにありました。

なかなか開通しない電気

建設を始める前に、施設への電気供給は郡政府が行うことで合意していました。建設中も郡政府に働きがなかったことから何度も働きかけを行い、なんとか電気工事を担当する会社に申請書を送るところまでは進みました。しかし電気を引くのに多額の資金が必要であることが建設後に判明し、やむを得ずロシナンテスも一部の費用を負担し、ようやく今年2月に電気会社が動き始めました。

アフリカの村落部で活動する際にはよくあることなのですが、郡政府の対応を待つばかりでは事態が進まないため、ロシナンテスは暫定措置としてジェネレーターを提供し、夜間の電気供給をサポートしました。これにより、井戸のポンプが稼働し水の供給が可能となり、分娩後のシャワーや滅菌、清掃に活用できるようになりました。その結果、2025年1月には、マザーシェルターで初めての分娩が行われました。

水が汲み上げられたタンク

妊婦さんに給食を! 新しい取り組み

安定して稼働するまでもうしばらくかかりそうですが、今後この地域で新たに給食事業を行う予定にしています。

マザーシェルターが利用できなかったことで、期待してくださっていた地域の妊婦さんたちをがっかりさせることになってしまいました。改めて、マザーシェルターを利用する意義と期待を感じてもらい、施設での安全な分娩を推奨していくために、1年間の期間限定で出産を予定する妊婦さんたちに食事を提供することにしました。

近いうちに皆さまに明るい報告ができることを祈りつつ、マザーシェルターが本来の目的を果たし、地域の母子保健に寄与できるよう、関係機関との連携を強化していきます。引き続き見守っていただけましたら幸いです。

専門家による技術支援も 結核事業の進展

ザンビアは結核患者の多い国の一つであり、結核対策は国の重要な政策に位置付けられています。結核の診断には痰で検査する喀痰検査とX線検査の2つが特に重要です。しかし村落部にはX線装置のない医療施設も多く、早期発見が難しいという課題があります。

合同で行ったX線画像の読影研修

即時検査に対応するため装置を4台に増設

そこで2023年、ロシナンテスは結核患者の早期発見を目指す事業を開始しました。富士フイルム株式会社様の協力を得て、ポータブルX線装置1台の試験導入を行い、中央州チサンバ郡・チボンボ郡の4つの医療施設（病院2か所、診療所2か所）で巡回診療を行いました。

1年の試験導入でその有効性が確認されたことを受け、2024年3月外務省の支援を受けてX線装置を3台追加購入しました。これにより、合計4台の運用が可能となり、各病院に2台ずつ配備されました。1台は病院内で常に使用でき、もう1台は診療所への移動用として活用されています。さらにX線装置を診療所に運搬するため、各郡に車両も配備しました。

現地人材の再研修と、日本人医師によるサポート

機器を使用するにあたっては人材育成も必要です。2024年は、X線画像の読影研修を、診療所スタッフを集め合同で実施しました。3日間合同で行ったことにより、施設間の交流が深まり、読影技術や診断精度の改善に向けた意見交換の場をつくることができました。また放射線技師を対象に、装置の使用方法についての再研修も実施し技術向上を図りました。

さらに、2024年8月から約3か月間、日本で呼吸器科医として勤務する小川恵医師が診断プロセスや患者管理の改善をサポートしてくださいました。研修やボランティアによる啓発活動に参加し、結核と肺炎の鑑別に関する助言や、結核患者の受診を管理する患者カードの作成などに尽力いただきました。

干ばつによる停電対策

2024年は深刻な干ばつの影響で停電が相次いだため、検査の運用にも試行錯誤が必要でした。ポータブルX線装置は充電式でバッテリーで稼働するものの、48時間以上の停電が起きると検査ができないこともありました。この問題を解決するため、ソーラーパネル付きのポータブルバッテリーを導入し、安定した運用を目指しました。

診療所スタッフと話し合う小川恵医師

今後の事業展開に向けて

ロシナンテス理事であり感染症専門医である高山義浩医師が1月にザンビアへ渡航し、今後の事業改善について駐在職員と議論しました。現在各診療所では月2～4回のX線検査が実施されていますが、それ以外の日は病院に装置が保管されている状態です。高山医師からの「診療所での検査頻度や実施先を増やすべき」との助言を受け、郡保健局とこの課題を共有しました。2025年度は診療所での検査回数を増やし、より多くの患者が必要な検査を受けられる体制を整える予定です。

3月27日には在ザンビア日本大使館関係者やザンビア保健省を招き、事業報告会を開催します。関係者とともに今後の事業の継続と拡大について議論を行えればと考えています。

血圧計・体組成計をザンビアの医療施設へ寄贈

ロシナンテスは、エレコム株式会社様よりご寄贈いただいた血圧計50台と体組成計18台を、ザンビアの医療施設に導入しました。これらは今後、妊産婦や患者の健康管理に活用されます。

理事長の川原も現地に入り、使用感について診療所のスタッフと確認を行いました

ロシナンテスはザンビアにおいて、母子保健事業や、結核事業を行っています。妊娠中の健康管理では、適切な体重増加量の確認や、妊娠高血圧症候群などの高リスクなケースの健康管理が重要であり、血圧・体重・BMIの定期的な測定が不可欠です。また、結核治療においても、血圧や体重の測定が適切な診断と治療に役立ちます。結核の症状には血圧低下や食欲不振による体重の減少が兆候として見られることがあります。また治療にあたり投薬量を調整する際にも正確な測定は重要です。

しかし村落部の診療所では、資金不足によりこれらの機器の設置が難しいのが現状です。また病院においても各部門に十分な血圧計や体重計が備わっておらず、患者の待ち時間が長くなったり、故障した機器での測定により診断の精度が低下したりしていました。そこで、ロシナンテスは事業地のあるチサンバ郡、チボンボ郡の保健局の担当者と協議し、必要な施設を選定して寄贈を実施しました。これにより、各医療施設で正確な測定が可能になり、診断までの時間短縮やより適切な治療が期待されています。

体組成計で体重を測る妊婦さんたち

待合室での結核感染を防ぐため、N95マスクを導入

この度、株式会社モレーンコーポレーション様よりN95マスク960枚をご寄贈いただきました。これらは、ザンビアの医療施設において、結核の感染拡大防止のために活用されます。

ロシナンテスはザンビアでポータブルX線装置を活用し、結核患者の早期発見を目指す事業を行っています。この事業により、施設を訪れる結核疑いの患者が増えていますが、待合室では他の患者と同じ空間で待機することが多いために、感染拡大のリスクが懸念されています。また、一部の施設では換気が十分ではなく、停電時には扇風機も使えないため、感染リスクが高まります。

そこで医療施設との議論の結果、郡保健局と施設が主導して、患者待合室の環境改善を行うことで合意しました。この改善が行われるまでの間、N95マスクの配布を行うことで感染防止策を行うことを予定しています。ザンビアの村落部ではマスクを入手できる場所が少なく、病院や診療所でマスクを受け取り使用するのが一般的です。また結核が疑われる患者の場合、確定診断を受けていないためマスクをせず来院するケースも多いのです。こうした人々からの感染を防ぐ一助となることを期待しています。現地の人々にとって使用しやすいものであるか、有用かの実証確認にあたり、感染防止対策に知見のある株式会社モレーンコーポレーション様よりマスクをご寄贈いただけることになりました。

現地でテスト装着を行ったところ、現地スタッフからは「簡単にサイズを調整でき、使いやすい」との声があがっています。

雲外蒼天

揺らぐ国際援助の現場 ～USAID停止で何が起きたのか～

2025年1月20日、2期目となるトランプ政権が発足しました。就任直後から次々に政策を打ち出し、世界に大きな混乱をもたらしています。なかでも、国際援助に関わる組織や活動現場に多大なる影響を与える政策が、対外予算の大幅削減とUSAIDの実質廃止です。

USAIDとはなにか

USAID（アメリカ合衆国国際開発庁）は、1960年代初頭に設立されたアメリカ政府の機関です。約1万人の職員のうち3分の2以上が、60カ国以上に配された国外の拠点やその他の国外地域で勤務しています。とはいえ、実際に現場で活動するのはUSAIDではなく、USAIDが資金提供や契約をしている他の組織です。USAIDの予算はアメリカの対外支出の半分以上を占めており、その大部分はアフリカ・アジア・ウクライナなどでの人道支援に使用されています。アメリカの人道支援における支出額は他国に比べて突出しており世界最大です。しかし、トランプ大統領と政府効率化省（DOGE）のトップであるイーロン・マスク氏は「対外支出はアメリカの利益にならない」として、異議を唱えているのです。

突然の対外援助停止

1月27日、アメリカ政府は対外援助のほとんどを最短で90日間停止すると発表しました。さらに2月23日夜からUSAID職員の大半が休職扱いとなり、2月27日には大規模な人員削減が実施されました。職員らに考える暇を与えない権威的な政策に、現場は大きく混乱しています。また、USAIDが結んでいる対外支援契約の約9割を打ち切る方針であることもわかっています。

国際保健への影響

USAIDの機能停止を受けて、国際保健の専門家からは強い懸念の声が上がっています。グローバル化に伴う人やモノの移動の活発化により、病気は蔓延しやすくなっています。また気候変動が、病気の多様化や罹患率の変化にも影響を与えています。こうした状況では、ワクチンや薬の提供だけでなく、USAIDの資金で支えられてきた水・衛生の支援（トイレの建設、安全な水へのアクセス向上、衛生教育など）も不可欠です。これらが止まれば、感染症の拡大につながる恐れがあります。

USAIDは、ウクライナをはじめとした紛争地や途上国において、人道支援活動を担ってきました。その活動は、医療・食糧支援、女性や子どもの人権保護、貧困対策、環境保護など多岐にわたります。分野を問わず幅広い影響力を持つUSAIDの機能停止が、現地に与える衝撃は計り知れません。実際に支援が途絶えた国や地域では、多くのプロジェクトが中断を余儀なくされています。

ロシナンテスの活動地では

USAIDの予算及び人員削減による影響は、ロシナンテスのザンビアでの活動にも及ぶ可能性があります。

ロシナンテスのザンビアで行っている活動のひとつに結核事業がありますが、結核の治療薬の供給はUSAIDの支援を受けて行われています。一時は薬の供給が完全に止まる懸念もありましたが、ルビオ国務長官が命に関わる治療薬の配給に関わる活動は実施できるようにしたことで、窮地を脱しました。しかし予算縮小は起こると思われるため、今後も影響が出る可能性は否定できません。

ザンビア保健省によれば、現在は19ヶ月分の治療薬備蓄があり、すぐに治療が止まるわけではないとのことですが、すでに一部に影響は出始めています。ザンビア保健省の結核事業マネージャーによると、USAIDからの資金援助が停止したことにより、ザンビア全土で必要な喀痰検査用カートリッジ（試薬）を購入する資金が不足しています。約336万米ドル（約5億円）が足りておらず、約36万6千人へのカートリッジが不足していることになります。

ザンビア駐在員によると、突然の活動停止に現地は混乱しており、今後どうなるかの見通しが立っていない状態だといいます。

安定的な支援活動のためには

アメリカという一国が援助を停止しただけで、世界各地のプロジェクトが次々と凍結に追い込まれました。この事実は、国際援助の現場がいかに大国からの資金に頼りきっていたか、その脆さを痛感させるできごととなりました。

世界人道支援報告書によると、2023年の人道支援分野への資金拠出総額は434億米ドルに上り、そのうち8割以上は各国政府や欧州連合（EU）機関からのものでした。しかし、民間の寄付などからの拠出も、73億米ドルと一定の割合を占めていることも注目すべき点です。不安定な国際情勢の中であっても、私たちは困難にある人々へ支援を緩めることはできません。持続可能な国際援助を実現するためには、各国政府の資金に頼るだけではなく、こうした民間からの支援をさらに強化していくことが求められるのではないでしょうか。

日々ツラツラ日記〈17〉

助産師 鈴木順子

ザンビア事務所で1か月間、一緒に仕事をさせていただきました助産師の鈴木順子と申します。

私にとって、今回が人生三度目のザンビア渡航。三回目ということで、入国審査での現地語での挨拶はバッチリ！ 入国もスムーズにいくと思ったのですが、ビジネスビザで滞在できる日数が以前の渡航により減ってしまっていることが発覚。対応してくれた女性の審査官に「この前の入国の際もややこしかったわよね、あなた。覚えているわよ」と言われ、なんだかお互い笑ってしまいました。その後は、検疫官にスーツケースを開けるように指示され、中に入っていた日本食がなぜ必要なのかと質問されました。私が「日本人の友だちが必要って言うから～、私はシマ（ザンビアの現地料理）が好きだから不要なんだけどね」と答えると、自国の料理を好きと言われたのが嬉しかったのか、検疫官が笑顔になり、それ以上質問されずに終わりました（良いのか悪いのかわかりませんが）。このような感じで、ザンビア人は全体的に穏やかな人が多いイメージです。

ロシナンテスのように地域保健活動を行ううえで、現地の人々の特性や生活を知ることはとても大事だなと感じます。皆さんもザンビアに来る機会があれば、是非シマを堪能して、現地語でのザンビア人との交流を楽しんでください！

左の白いものがザンビアの主食シマ

EVENT IMFORMATION 国内イベント情報

【参加費無料】 最初の一歩を踏み出す 『エンディングノートの書き方・活かし方』 ～自分らしい相続・遺贈講座～

「もしものときに備えて、自分の思いや大切な情報を整理しておきたい…」そんな方に向けた実践的な講座です。本イベントでは、病院や相続など自分の 大切な情報を1冊にまとめておける「エンディングノート」の書き方を学びながら、相続・遺言・遺贈寄付についても理解を深めていきます。ご参加いただいた方には、エンディングノートをプレゼントいたします。

日時 ■2025年5月15日(木)
16:00-18:00（15:40受付開始）
場所 ■小倉昭和館
（〒802-0006 福岡県北九州市小倉北区魚町４丁目2-9）
講師 ■齋藤弘道様（遺贈寄附推進機構株式会社）
登壇 ■川原尚行（認定NPO法人ロシナンテス）
詳細・申込 ■https://www.rocinantes.org/news/event/?no=239

【ご支援者様限定】 スナック路志南亭（ろしなんて）＠東京

ロシナンテス職員がスナックの1日店長を務めます！お飲み物片手に、日頃感じるロシナンテスへの疑問や想いを共有するなど、楽しい時間をすごしませんか？「スナック路志南亭」へのご来店心よりお待ちしております！

日時 ■2025年4月30日(水) 19:00-22:00（コアタイム19:30-21:00）
場所 ■KOREWOKINI flat（〒104-0061 東京都中央区銀座3丁目14-8 片桐ビルV302）
参加費 ■チャージ（600円）＋ワンドリンク（500円～） 定員 ■30名
※食事の提供はありません。お好きなものをお持ち込みください。
詳細・申込 ■https://www.rocinantes.org/news/event/?no=240

【ご支援者様限定】 ロシナンテお料理会＠北九州

ロシナンテスの事業地である ザンビアの伝統料理を一緒に作りながら、ロシナンテス職員と交流するイベントです。ザンビアの食文化に触れながら、ロシナンテスの活動について理解を深めてみませんか？

日時 ■2025年5月17日(土) 11:00-15:00（10:50 受付開始）
場所 ■ココクル平野くるくるスペース
（〒805-0062 福岡県北九州市八幡東区平野1丁目3番2号）
参加費 ■無料 定員 ■10名 持ち物 ■エプロン、ハンドタオル
詳細・申込 ■h ttps://www.rocinantes.org/news/event/?no=241

コラム 医学生インターンが考察！「日本の母子保健の歩み ―アフリカに活かせる知恵とは」

日本の乳児死亡率は、2021年時点で1,000人あたりわずか2人。世界でもトップレベルの低さを誇り、最高水準の母子保健サービスが提供されています。一方、ザンビアをはじめとするサハラ以南のアフリカでは、乳児死亡率は1,000人あたり50人前後と非常に高い水準です。

実は、かつての日本も1950年頃には1,000人あたり60人程度と、今のアフリカ諸国と同じように高い水準でした。しかし、公衆衛生の向上や母子保健制度の整備によって、乳児死亡率は急激に改善していきました。

日本はどのようにしてこの改善を実現したのでしょうか。そして、その経験はアフリカなどの国々でどのように応用できるでしょうか。

自宅出産から施設出産へ

現在、日本では出産の98.5%が病院や診療所などの医療施設で行われています。自宅やその他の場所での出産は、1%未満です。しかし1950年代までは、自宅での出産が全体の95.4%を占めていました。1960年代に入ると自宅出産は急速に減り、1970年には4%まで低下し、これと同時に、乳児死亡率も大きく改善していきました。

この変化の背景には、1961年の国民皆保険制度の導入があります。これにより、全国の医療施設の整備が一気に進み、医療施設へのアクセスが困難だった農村地域でも医療を受けやすくなりました。医療施設へのアクセスの向上が、現在の国際保健協力分野において理想とされている「専門的な訓練を受けた者の立ち合いの下での出産」を可能にし、母子の健康に大きく寄与したのです。

助産婦の登場

妊娠から出産・育児まで母子の健康を支える助産師は、江戸時代には「産婆」として一般的に知られていました。産婆はお産の介助だけでなく、妊婦の日常的なケアや指導も担う存在でした。明治時代に入り、国の近代化とともに、産婆は「富国強兵」のための人口増加を支える重要な職業となります。戦後、GHQによる看護職の見直しを受けて「産婆」は「助産婦」へと改称され、資格取得が必須となりました。そして厚生労働省は、助産婦による妊産婦への保健指導を強化すべく、以下の取り組みを進めました。

- **母子健康手帳の活用促進**
- **保健所での健康診断の推進**
- **医療施設での出産の奨励**

再教育を受けた助産婦は、自身の出産や育児の経験に加え、専門的な知識も身につけたことで、地域の人々に寄り添ったケアを提供していきました。

母子健康手帳の登場

早産や妊娠合併症による異常分娩は、胎児の健康リスクを高め、乳児死亡の大きな原因になります。これを防ぐため、妊婦の把握と健診促進を目的として、1942年に「妊産婦手帳」（いわゆる母子健康手帳）の配布が開始されました。この日本の母子健康手帳制度は、妊婦の登録制度として、世界で初めて導入されたものです。

手帳を持つと、無料の妊婦健診や予防接種を受けられるほか、戦時下では食糧や物資の配給も受けられる仕組みになっていました。このように妊婦にとってのメリットが明確だったため、広く普及したようです。手帳には、妊産婦の心得や健康状態、分娩記録などが簡単にまとめられていました。妊娠や出産の記録を残すことで、次回の妊娠・出産時に役立つ重要なデータとなりました。

1948年には児童福祉法の施行に伴い「母子手帳」に改称され、妊産婦だけでなく乳幼児の保健指導も含む内容に機能が拡大されました。現在では、約50か国で、それぞれの国の文化や社会状況に合わせた形で活用されています。母子健康手帳は、母親の健康知識を高め、妊娠・出産・産後の行動改善にも大きく貢献しているのです。

日本の母子保健の歩みを活かして

このように、日本の母子保健サービスは、医療の充実と革新的な公衆衛生政策によって発展してきました。この成功を、アフリカ諸国にも活かすには何が必要なのでしょうか。途上国では、社会保障制度の未整備や貧富の差、医療従事者や医療施設の不足など、妊産婦と赤ちゃんを取り巻く環境が先進国とは大きく異なります。しかし、日本の歴史における「助産師の活躍」や「母子健康手帳の活用」など参考できる点は多くあります。

例えば、アフリカには地域に根付く伝統的な助産師が存在します。この伝統を尊重しつつ、近代的な医療知識を持つ専門職へと育成することが、現実的な解決策の一つかもしれません。ロシナンテスの活動するザンビアでは、医療施設での分娩を促進するため、伝統的な産婆による助産を違法としました。しかし彼らの多くは今、新たに「ヘルスボランティア（SMAG）」として研修を受け、母子の健康を見守る役割を担っています。SMAGは医療従事者が圧倒的に不足しているこの国で欠かせない存在です。

一方ザンビアでも母子健康手帳の普及が進んでいます。しかし日本と異なり医療人材が不足しているため、記録作業に時間がかかる、健診データが活用できるレベルで管理されていないといった課題もみられます。そこでロシナンテスは、スマートフォンを活用して母子情報を効率的に記録するシステムの活用を模索しています。日本では制度が確立されているため導入にハードルがありますが、医療人材が限られているアフリカでは、デジタル技術やICTの活用が医療の質を向上させる大きなかぎとなる可能性があります。

日本の成功事例を参考にし、それぞれの地域に適した形で母子保健を支援していくことで、より多くの命が守られることを期待したいです。

NEWS & IMFORMATION 国内ニュース＆お知らせ

グローバルヘルス合同大会に参加しました

ロシナンテスは、2024年11月16日～17日に沖縄県で開催された「2024年グローバルヘルス合同大会」に参加しました。この大会は、1999年に「21世紀の熱帯医学と国際保健医療協力」をテーマとして、日本熱帯医学会大会と日本国際保健医療学会が共同開催した学会をきっかけに、全国各地で実施されているものです。当日は、ロシナンテスがザンビアで進めているポータブルX線を活用した結核事業について発表し、保健医療の専門家と意見交換を行いました。

2022年にザンビアを訪れた喜多悦子先生が座長を務めたシンポジウム「国際保健医療協力と新技術の展開」では、理事長の川原が登壇しました。新しい技術を国際保健にどう活かしていくかについて、5名の登壇者が事例を紹介し、意見交換を行いました。川原は、日本では導入が難しいICTを活用した医療体制をザンビアで構築し、日本に逆輸入する可能性について言及しました。シンポジウム終了後には、多くの医師や医学生から質問が寄せられ、アフリカなどでの国際保健医療への関心の高さが感じられました。

また会場内では「ザンビア中央州におけるポータブルX線装置導入による結核早期発見と医療アクセスの改善」と題したポスター発表も行いました。このポスターでは、2023年5月～2024年1月の検査データを分析し考察をまとめました。ポスター作成にあたり、水本憲治先生やロシナンテス理事の高山医師から助言をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。ロシナンテスの事業を学会で発表することは初めてのことでしたが、多くの方に活動を知っていただく貴重な機会となりました。

健康博覧会に出展しました

ロシナンテスは、2月26日から28日までの3日間、東京ビッグサイトで開催される「健康博覧会2025」に出展しました。

今年で43年目を迎える「健康博覧会」は、「ひと・社会・地球の健康を考える」をテーマに健康に関連する製品やサービスが一堂に会する、国内最大級のビジネストレードショーです。今回、SDGs達成に向けて活動する団体の一つとして、「SDGsラウンジ」エリアに無償でブースをご提供をいただくことができました。

ロシナンテスのブースでは、寄付型自動販売機や古本募金など、企業や団体が取り組めるさまざまな支援方法をご紹介しました。会期中は、アフリカでの事業展開を検討されている方や、寄付付き商品や寄付型自動販売機に関心をお持ちの方など、さまざまな方にロシナンテスの活動をご紹介することができました。

運営にあたっては6名のボランティアの皆さまにご協力いただき、会場設営や撤収、来場者への対応をサポートしていただきました。ご協力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

北九州市の18の小中学校で出前授業を実施

今年度も「アフリカから学ぶ国際教育プロジェクト」の活動として、北九州市の公立学校で出前授業を行いました。このプロジェクトは、ロシナンテスと学校が連携し、北九州市の子どもたちにグローバルな視野を育む学びの場を提供するものです。アフリカに滞在経験のある講師が授業を担当し、アフリカの生活や文化、NPOの活動を教材にしています。北九州市の「ふるさと納税を活用した協働のまちづくり推進事業」として採択され、企業版ふるさと納税による北九州市からの補助金で実施しています。

昨年度は市内9校の小学校で授業を行い、大変好評をいただきました。今年度はその規模を拡大し、17校の小学校に加え、新たに1校の中学校でも授業を実施することができました。

実施校の先生方からの感想の一部をご紹介いたします。今後も、ロシナンテスは、子どもたちが世界を身近に感じられる学びの場を提供していきます。

授業を実施した先生からの声（あやめが丘小学校）

教科書では知ることができない世界の「リアル」、課題に立ち向かう人の思いについて知ることのできるとてもよい機会でした。紛争や貧困のことなど、世界で今実際に起こっている問題について、食い入るように真剣に話を聞く子どもの姿から、その事実を自分事として捉えることができているようでした。また、教科書に準じ、教師が知ってほしい内容をしっかりと伝えてくださったことも、社会科の学習として、とても助かりました。この学習とは別に、外国語科の学習としても、アフリカの様子についてお話をしていただく機会を設けていただいたこともあり、今回の話にスムーズに入り込むことができている様子でした。社会科と外国語科を横断的に学習したことで、単なる知識としてだけではなく、子どもの記憶に残るよい機会となりました。